



ヨーロッパでもこの花からそんなイメージを連想した人はきつといたはずだが、しかし、それではこの花があまりに可愛いそうなので、ふぐりをパンにイメージ替えたのかもしれない。

とまれ、この「豚のまんじゅう」という名詞は、明治から大正の末期ごろまで通用していた。ところが、かの植物学の大家、牧野富太郎博士が新宿御苑で初めてこの花を見て、連れの女性にその名を聞くと、豚のまんじゅうという、なんとも無粋な名前であることを知り、憐憫の情抑えがたく、数日間、沈思黙考『かがり火花』とネーミングされたという。

ちなみに、この花に横から照明を当ててみると、いかにも優美なかがり火のようにみえるからさすがである。ところで、この花の花言葉というのが、豚のまんじゅうに劣らず「疑惑」にみちている。もちろん、民族によって感じ方が違うからだが、まず、「はにかみ、内気・温い心」はなんとかかわかるとして「猜疑心・疑惑」となると、どうにも頭を抱え込まざるをえない。名前を借用された豚自身が、いちばん首をかしているのではないか。

パンで明治以来のありがた迷惑

シクラメンといえば、いまでは子供でも知らない者がいないくらいポピュラーな花になった。が、戦前の記録や詩集などでこの花の名を探そうとしてもほとんど不可能に近い。というより、シクラメンというネーミングそのものが戦後の産物だからである。

シクラメンは、古くは英語では「ソープレッド」つまり「野豚のパン」といい、この珍妙な名前のために、明治の中期にこの花がわが国に伝えられたときにはみんなが頭を抱え込んでしまった。

パンについてはすでに知られていたが、一般の国民にはまだなじみでなかったため、パンに似たものとして「まんじゅう」が引き合いに出され、とりあえず「野豚のまんじゅう」と訳してみた。しかし、野豚では語呂も悪いし、花のイメージにもそぐわないとして、間もなく「豚のまんじゅう」という名に落ち着いた。

話を元にもどすと、英語でなぜこの花から「野豚のパン」を連想したかについては、決定的な説明はどこにも見当たらない。というより、わが国の翻訳者のなかにも、これを「豚のふぐり（こうがん）」と訳した人がいて、そういわれて眺めれば、その形はパンよりも例のものに似ているといえないこともない。